

## 入選

### 厚意と行為

佐賀県 佐賀大学教育学部附属中学校

2年 小野原和子

「暑いでしょう、大変ね」。

それは先日、バスに乗ったときのこと。私は1人の老婦人に、席をゆずってもらった。嬉しい、と思った反面、「困ったな」とも感じた。学校にて、「ご高齢の方には席をゆずろう」と教えられたからだ。それがまさか、自分が席をゆずられたので戸惑った。結局、そのときはご厚意に甘えた。

だが、後に車内で立つことになってしまったその方を見て、申し訳なく感じた。彼女が降車しても、頭はそのことでいっぱい。老婦人が座っていた、その優先席。私なんかがゆずられてよかったのだろうか。ご提案をお断りした方がよかったのではないか。でもそれは失礼になってしまうかな。確かに外はすごく暑くて、バスを待っている間に汗をびっしょりかいてしまったけれど、それも特別私だけが感じたことではないだろう。

そんなことばかりをぐるぐるぐるぐる、考えていた。今思うと、当時の私は老婦人の行動ばかりに目を向けていて、そこから何も読み取ろうとはしていなかった。「席をゆずってもらった」という相手の行動を、受けるか断るかでしか考えられていなかった。「厚意に甘えて」の意味をとり違えていた。決して「行為に甘えて」ではなかった。老婦人の笑顔と柔らかな言葉からにじみ出ていた、温かい「想い」をまるきり見ていなかったのだ。

ずっと、席をゆずるという行動そのものが「親切」なものだと思いこんでいた。今なら言える。それだけではない。行動の奥にある柱のようなもの。それは「相手を想う気持ち」。アクションを起こすことは大切だが、そこに柱がないと、すぐに崩れてしまう。例えば、「年配の方には席をゆずるべき」と習ったからただそうするのと、相手の身を案じて席をゆずるのでは、同じことをやっているように見えてもまったく違う。「親切」の真髄<sup>しんずい</sup>はそこにある。

優先席という言葉には「優しさ」がかくれている。私はこれ以来、年配の方にバスでの席をゆずるようにしている。それは私自身が「ゆずりたい」と思うからだ。でも当然、断られてしまうこともある。それでも嫌な気持ちにならないのは、行為を断られたからといって、私の思いまで否定されたわけではないからだ。それに断る方の言葉の端々からも、優しさが感じられて、うれしい気分になる。誰かのことを大切にしたい、と想う柱を心の中に構えることは、人と人とのつながりがやや無機質になりつつある現代に必要なことだと思う。

考え方を少し変えるだけで、世界の見え方が大きく変わる。このあふれ出る感情や思いによって、自分の数多<sup>あまた</sup>の行動が受けとった人の心が温かくなるような「親切」へとなればいいな、と心の底から思う。まずは相手を想うところから、少しずつ。